氏名	若林　一惠
ヨミガナ	ワカバヤシ　カヅエ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第281号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　エドガー・ウィレムスの音楽教育の意義 ―その思想および実践の考察を通して―

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	山下　薫子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	佐野　靖
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	照屋　正樹
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	テシュネ　ローラン

（論文内容の要旨）

本研究は、20世紀のスイスやフランスを中心に活躍した音楽教育家エドガー・ウィレムス（Edgar Willems, 1890-1978）の音楽教育について、実践とその基礎となる思想の両側面から明らかにし、同時代の社会背景や教育学、音楽教育の歴史的な背景や関係性をも踏まえた上で意義付けるものである。

そのための手続きとして、主に①ウィレムスの原典資料に基づく思想的側面の明確化、②ウィレムス国際会議（2014年イタリア）およびウィレムス国際セミナー（2015年スロベニア）への出席による実地調査、③ウィレムスが教育実践について記した17冊にのぼる一連の著書『教育の覚え書き帳(Carnets pédagogiques)』の分析、④ウィレムスと同時代の社会思想や教育学、音楽教育に関する文献調査の4点を行った。

本論は4章構成となっている。第1章ではまず、ウィレムスが誕生する前後の時代背景に着目することによって、ウィレムスの音楽教育がどのような背景の下に誕生したのかを探った。この時代は、18世紀半ば以降の産業革命によって市民の生活が近代化し、それに伴って多方面での新たな問題意識に基づく運動が活発になっていた。その中でも特にウィレムスの生涯や音楽教育と関係が深いと考えられるのは、教育学領域で巻き起こり音楽教育分野にも影響を与えた新教育運動と、各国での芸術運動の発端ともなったウィリアム・モリスのアーツ＆クラフツ運動である。第1章では、これらの運動とウィレムスの活動との関わりや類似点について考察した。

次に第2章では、ウィレムスの生前の活動に着目し、影響を受けた人物と後世にわたって影響を与えることになる教育活動およびその協力者について概観した。影響を受けた人物としては、レイモンド・ダンカン、リディー・マラン、エミール・ジャック＝ダルクローズを挙げ、その思想や活動とウィレムスの音楽教育活動との関わりを明らかにした。影響を与えた活動としては、ジュネーヴ音楽院で教鞭を執り始めてから活発に行われた執筆活動や国内外での講演の状況について述べた。また、ジュネーヴ音楽院でウィレムスの生徒でもあったジャック・シャピュイの協力と、現在も活動が続く国際ウィレムス連盟の設立についても述べ、現在におけるウィレムスの音楽教育の普及状況と照らし合わせて考察した。

第3章では、ウィレムスの音楽教育思想に着目した。ウィレムスは、音楽教育家となるより以前にすでに、音楽の三要素「リズム、メロディ、ハーモニー」と人間の生の三要素「生理的な生、情動的な生、精神的な生」のそれぞれの緊密な関係性を発見しており、それに基づいて音楽教育思想を構築している。また、乳児が母国語を習得していく際の心理学的な発達に音楽的な諸要素を習得していく過程を照らし合わせてもいる。音楽的な諸要素を習得する上で最初は感覚的な活動が重要となることから、ウィレムスが特に重視している聴覚育成に向けられた思想について概観した。

第4章では、ウィレムスの教育実践に着目した。まず『教育の覚え書き帳』のうち現在入手することができ

るものの内容を分析した。次に、ウィレムス国際会議やウィレムス国際セミナーで実際に行われた教育実践例を挙げて分析した。これらから得られた成果を通して、ウィレムスの記述したものが現在の教育実践にどのように反映されているのかを考察した。

本論を通して明らかになったこととして、以下の三点が挙げられる。

１．ウィレムスの音楽教育は、内的聴感の育成に重きを置いたものである。

２.「知識を与える前に経験させる」という教育視点に、新教育運動の影響がみられる。

３.「音楽」の三要素と「人間の生」の三要素の緊密な関係性に基づく思想は、ウィレムスが音楽教育家となる以前から晩年に至るまで一貫している。

ウィレムスは、内的聴感をはじめとする音楽的な感覚を先に育て、後からそれらの裏付けとして読譜と音楽理論を学習することによって、理論と実践とが乖離しない音楽教育を実現している。さらにその後に楽器の演奏を始めるため、子どもたちが音楽的な感覚を備えた状態から演奏を始めることができる。音楽家志望であるかどうかに関わらず､すべての子どもたちがこのような質の高い音楽教育を享受できることは､将来、音楽文化の裾野を広げ、隆盛させていくことに直結していると考える。教育の成果を長期的な視点で検証していくことは、今後の課題である。

（総合審査結果の要旨）

本研究は，エドガー・ウィレムス（Edgar Willems,1890ラナケン［ベルギー］～1978ジュネーヴ［スイス］）の音楽教育を，理論と実践の両面から明らかにし，時代的・社会的背景をも踏まえた上で意義づけようとしたものである。

ウィレムスの音楽教育は，ヨーロッパのフランス語圏とイタリア語圏，そして中南米で高く評価されているが，日本はもとより，英語圏，ドイツ語圏にも普及しておらず，先行研究が著しく不足している。かねてより，その言説の一部が，ソルフェージュの教育研究者の間で知られるところとなってはいるが，日本語に全訳されている彼の著作物はまだない。その中で，フランス語によって書かれた原典資料を取り寄せて翻訳するとともに，国際ウィレムス連盟（本部はリヨン［フランス］）が主催する国際会議や国際セミナーに参加して，その実態を把握しようとした申請者の労力は高く評価される。

本論文は次の４章からなる，ウィレムスの音楽教育の成立背景（第１章），ウィレムスの音楽教育に関わる人的交流と普及活動（第２章），ウィレムスの音楽教育思想（第３章），ウィレムスの音楽教育実践（第４章）。第１章では，19世紀末から20世紀初頭に巻き起こった新教育運動や19世紀のアーツ・アンド・クラフツ運動との共通点を指摘した。第２章では，レイモンド・ダンカン，リディー・マラン，エミール・ジャック＝ダルクローズがウィレムスに与えた影響を明らかにするとともに，ウィレムスの思想や実践の普及に尽力したジャック・シャピュイらの活動について記述した。第３章では，ウィレムスの主たる著書をひもとき，人間の生と音楽や芸術とのかかわり，音楽の導入とその習得過程，内的聴感の育成に向けた提言などの観点から，教育理念を示している。そして第４章では，17冊に及ぶ一連の指南書の分析に加えて，前述した国際会議（2014年イタリア）と国際セミナー（2015年スロベニア）における実践の分析を通して，その具体的な内容と方法を明らかにした。

以上の検討を踏まえて，次の３点が結論として示されている。１．ウィレムスの音楽教育が内的聴感の育成に重きを置いたものであること。２.「知識を与える前に経験させる」という新教育運動の影響がみられること。３.「音楽」の三要素と「人間の生」の三要素との緊密な関係性に基づく教育思想が，終始一貫した軸として機能していたこと。

本研究の意義は，大きく２点に集約される。１．原典資料の探索と収集を行い，自らの邦訳によってその全体像を示した本研究は，今後のウィレムス研究の基礎をなすものであること。２．ウィレムスの指導法とその対象者である子供たちの様子を，実地調査に基づいて生き生きと描き出したことにより，日本への導入可能性について検討するための材料を提起し得たこと。

口述試問では，積極的な研究姿勢と独創的な取組，とりわけ翻訳の努力が評価された。日本語としてこなれていない訳文や原語のニュアンスを十分に伝えきれていない訳語が見られるものの，その内容は一定の水

準に達している。そのほか，思想的背景についての考察では共通点を示すに留まっていること，実地調査した実践事例が国際会議や国際セミナーに限定されていることなど，解決すべき課題が残されていることは，申請者自身も認めているところである。

とは言え，「聴くこと」に焦点を当てたウィレムスの音楽教育の理論と実践は，現代における日本の音楽教育にも一石を投じるものであると考えられることから，音楽教育の課程博士として優れた成果を上げたと判断し，合格とした。